

日本植民統治初期における台湾人の資本主義体験

高 淑 媛
(閩 立 訳)

はじめに

機械と動力を使用して商品を生産する資本主義の生産様式は、どのように台湾社会に導入されたのだろうか。日本統治初期の総督府は機械を利用して台湾の生産体制を改良することを奨励していた。総督府の勧誘にしたがって、多くの台湾の郷紳が東京や大阪など、近代的工業と商業の栄える大都市や機械化された工場、会社、専門学校などを見学することで、日本の富と文明および機械の力を実感しえた。近代台湾において機械文明に関連する知識は、このよ

うな日本体験によってはじめて台湾に導入されたのである。

参加者はかなりの多数にのぼり、その出身地域もまた多様であった。例えば、嘉南平原の山沿いにある台南東山の前大埔庄は、山の景色が美しい地域であるが、その庄長を務めていた陳朝進は、鉄道が敷設されていなかった一九〇三年に日本見学に参加した。彼は「大阪へ行って博覧会を見学した。六月に台湾に帰って庄民を集めて日本での見聞を述べた。その観察は細かく、論議は公正であった。聞いた人々は文明に関することを理解した^①」という。当時台湾はまだ伝統社会であり、周囲を山に囲まれた前大埔庄の庄長は交通の不便をおして、船で大阪に赴き、帰国後、近代文明を山岳地域にもたらしたという。これはどういう意味

を持っていたのか、また、こういったことが実行できた契機は何であろうか。

陳朝進の日本見学の経緯に関する呂紹理の研究によると、総督府は大阪で第五回内国勧業博覧会が開催されることを利用し、台湾郷紳の日本見学を大々的に勧誘した。先述した前大埔庄長陳朝進は、その勧誘を受けて日本に行つたと思われる⁽²⁾。しかし、近代経済には植民地原則というものがある。すなわち、一般的に植民地では低水準の文明を維持するというものである。総督府が台湾郷紳に日本見学を勧誘した目的は何であったのか。また、総督府は積極的に近代文明を台湾に導入しようとしたのであろうか。

一八九六年に樺山資紀総督は「治台開化」という目標を實現させるために、郷紳李春生などの日本見学の旅費を国家予算より調達した⁽³⁾。日本統治初期においてこのように公費で郷紳らを日本へ招待したのは、一八九六年のみではなかった。その後、台湾統治の目標が「治台開化」より「殖産興業」へと変更されるに伴い、日本は一九〇三年の大阪博覧会の開催を利用して、日本各地の近代化を最大規模に展示しようとした。総督府は積極的に郷紳を勧誘し、彼らに日本の近代化を実感させ、近代文明を台湾に導入しよう

としたのである。

当時はまた、台湾社会でも近代文明に対する期待が現れていた。陳培豊は「国語」教育受容との関連で、台湾社会での積極的な文明導入の動きを説明している⁽⁴⁾。このように台湾社会が近代文明に関心を示すようになった時代において、日本見学は台湾社会における機械の使用および機械文明の導入といかに関わつたのであろうか。この問題を解明するために、日治初期における台湾郷紳の日本見学の経緯および帰国後の行動について整理する必要があると思う。

これまで、植民地統治・教化、女性観、個人史などの側面から、台湾郷紳の日本見学の重要性が研究されてきた。先述した呂紹理の研究によれば、総督府は植民地支配の立場から一九〇三年の大阪博覧会を利用して、台湾郷紳の日本見学を強く勧誘した。日本訪問を通じて日本の近代化を実感させ、日本支配を受け入れさせる政策であった。一方、博覧会自体は殖産興業の象徴となり、台湾郷紳は博覧会や日本の大都市などを見学することで、職業教育、会社、機械などの近代化の諸要素に関心を示した⁽⁵⁾。

台湾郷紳の女性観の変化については洪郁如の研究がある。郷紳らは社会の中で活動する日本女性を見たことで、帰国

後、女性労働力を生産に導入したり、妻や娘を学校に入學させたりして、新たな「内助」の女性像を作り出した。⁽⁶⁾

個人史としては、日本を見学した辜顯榮・李春生についての研究が蓄積されているが、辜顯榮の研究は主に伝記が中心となっている。⁽⁷⁾

しかし、これらの諸先行研究では資本主義と機械文明という側面についてはほとんど触れられていない。

一方、日本の研究者は最近、日治初期の台湾総督府が台湾社会と協力して産業経済を發展させたことに注目するようになってい⁽⁸⁾る。これを踏まえて、筆者は台湾社会の側から資本主義の導入と関連する諸問題の解明を模索している。

総督府の勧誘によって進められた資本主義機械文明の見学は長くは続かなかつた。一九〇三年の参加者は五〇〇人を超えたが、これがピークであると同時に、日本見学へのピリオドともなった。その後、日露戦争、台湾財政の独立、日本金融資本の發展など、一連の変化によって台湾は帝国主義の投資植民地として位置づけられていく。しかし、日本見学の影響がもたらした機械文明についての認識水準を台湾社会は依然として維持していた。また、考え方の変化はその後の台湾の工業化に大きな影響を与えたといえよう。

本論文では、台湾郷紳が帝国植民地統治のもと、日本を通して間接的に資本主義の機械文明を認識した、その意味合いを分析するとともに、日治時期における台湾郷紳の日本見学が台湾の工業化にどのような意義を持っていたのかを究明したいと思う。

一 酬庸協力者と治台開化

日本が台湾を領有した一八九五年から始まる台湾郷紳の日本見学ブームは、総督府の政策の変化によって二つの局面に区別しうる。その変化とは、一八九七年の「治台開化」から「殖産興業」への転換である。⁽⁹⁾

一八九五年から樺山資紀総督は「治台開化」の一つの手段として日本見学を發案し、選択的に台湾郷紳を日本へ招待した。一八九五年一二月に民政局長の水野遵は東京に帰る際に辜顯榮を同行させたが、東京で水野は日本のメディアに、辜顯榮の協力を次のように伝えている。「日本は基隆港から上陸してから南征を開始した。辜顯榮は沿道で人夫や食料などを調達し、中部の鹿港において平和的な雰囲気の中、日本軍を迎えさせた。その功績で彼は勲六等を叙勲された。台湾の協力者に日本を見学させることは今後の

行政に有利になるため、辜顯榮を東京まで同行させ、また有名な帝国ホテルに宿泊させた¹⁰⁾と。つまり総督府が国家予算を使って協力者を日本へ招待した目的は、植民統治に利用するところにあつた。

辜顯榮の次に招待されたのは李春生である。一八九六年二月に李春生は樺山総督とともに日本で六四日間滞在した。日本での会談の際に、樺山資紀は李春生に、日本での見聞を台湾に紹介し、治台開化に役立ててほしいとの期待を伝えている。そこで、李春生は滞在中ほぼ毎日日記をつけ、台湾に帰るとすぐに『東遊六十四日随筆』を刊行した。

その記述によると、三月一二日に再び李春生を訪問した際、樺山は日本の著名人を紹介し、日本各地の名所や学校、製造所などを案内することを約束した。翌日、水野は李春生を横浜の大谷嘉兵衛の製茶会社に案内した。李春生は日記に「茶の加工から包装まですべて機械で仕上げる。それは整然としていて完璧である」と書いた。一四日に見学した国立の活版印刷所については「すべてのものが素晴らしい。その規模は非常に大きいが、全部西洋式である」と記述している。一九日に見学した王子製紙については「機械は精巧で様式はさまざまである」と、また織絨工場につい

ては「各所の機械や作業場は規模が大きく、やり方は西洋式である」というように、機械製造を称賛している。二日に訪れた鉄砲製造所については「建物は立派で機械の数は非常に多い」と述べている。四月八日に浅野セメント工場を見学したが、浅野総一郎は工場を作る資金には最低三〇万円がかかるといった。李春生は故郷である台北郊外の汐止に原料となる生石灰の山があることを思い出した。またその近辺では水と石炭も得られ、動力は十分に確保できるので、セメント製造をやろうと思った。彼はその場で浅野などの日本人に共同経営を誘ったが、賛意を示す者はだれもいなかった。綿紗の工場を見学したあと、「機械は棉花を紗にかえてまた紗を梱包する。機械の素晴らしさは筆で描写できない」と称賛している¹¹⁾。

李春生が見学した工場の機械はほとんどが海外から輸入されたものであった。李春生はそれが「西洋製」であることを見抜いていた。そして彼は台湾に帰ったあと、一九〇八年にセメント製造を計画する¹²⁾。

このときは李春生だけが招待されたのではなく、以下の人々も同行していた。アメリカ新聞記者ダビッドソン (Davidson)・達鳳翽・楊懷瑾・沈傳・張柏堂・葉壽松・王

木肇（ダビッドソンの随従）・呂丙（李春生の随従）である。留学生七名も同行した。李延齡（一六歳）・李延禧（一四歳）・李延昆（一二歳）・陳培炳（一三歳）・李源頭（一五歳）・李解紛（二六歳）・林仁通（二四歳）の七名である。少年たちは李春生の孫と親戚の子供で、日本に残して勉強させることになった。そのほかに自費で同行した者が四名いる。

郭章籌・吳子周・吳韻・楊錦州である。一行の中で辜顯榮のような叙勲者には他に李春生・達鳳翱・楊懷瑾・沈傳がいた。沈傳は日清戦争中に東北で日本軍に情報を提供していたために一度は逮捕されたが、賄賂によって罪を免れた。日本が台湾を領有してのち台湾に渡り、日本軍医保課の囑託となった。達鳳翱は一八九五年に日本海軍に協力した際、台湾籍に転じ、同年に楊懷瑾と一緒に海軍局の職員になった。彼らは日本軍に情報を提供した功績で、一八九七年一月に勲六等を授与されたのである。¹⁴

李春生と同行した張柏堂と葉壽松は最も早く日本教育を受けた学生であった。葉壽松は大稲埕の区長である葉為圭の姪であり、一八九五年に総督府学務部の芝山巖学堂で学務部長である伊沢修二の指導を受けていた。彼と葉壽松は芝山巖学堂によって日本に派遣されたのである。この派遣

は総督府の官員の提案によって行われた。当時、橋本武・伊能嘉矩・木下邦昌は台北県などを視察したあと、台湾の人材と富豪の子弟を日本に行かせることを提案した。百聞は一見にしかず、実際に進歩した日本を体験し、現実と向かい合うことができるという考えであった。¹⁵

この後も、総督府は学生を引き続き派遣した。一八九七年七月に国語学校の学生二一名が日本に派遣されている。¹⁶総督府によって一人当たり一三五円の旅費が支給された。¹⁷一九〇三年の大阪博覧会の際の四〇〇五〇円という予算と比べると、国語学校の学生が優遇されていたことがわかる。台湾を文明社会へ導こうとする総督府の積極的な態度を示すものといえよう。¹⁸

私費で李春生とともに日本に行った郭章籌・吳子周・吳韻・楊錦州は、巨額の費用を支払うことのできる郷紳であった。吳子周の家は明鄭時期に台南に移民し商売を始めた。彼は子供の頃から勉強好きであったが、科挙試験に何度も失敗したため、金を納めて国子監生員という身分を買った。日本が台湾を領有した後、吳子周は地域の安定に協力した功績で、一八九七年四月に紳章を授受し、のち保甲局長と台南県参事を務めた。¹⁹

一八九六年の秋には林紹堂が吳子周と同様に自分の意志で日本見学に参加している。林紹堂は台湾中部の名族である霧峰林家の一員であった。台湾が日本領となったとき、当主であった林朝棟は福建へ戻った。彼は台湾を離れるとき郷勇軍の指導権を林紹堂に譲った。一八九六年六月に雲林抗日蜂起が起こった際、林紹堂は日本政府に協力したことで勲六等を授与された⁽²⁰⁾。受勲後、林紹堂は自ら日本見学を申し出た。八月に彼は台中県に対して、日本各地を遊歴し、帝国の機械化された工場を見学し、実務の道を探るという願いを出すのである⁽²¹⁾。李紹堂は日本の大阪で豪商の住友・藤田に招かれ、宴会の際に共同で樟脳製造を経営することに合意した。一八九七年に大阪の住友組・藤田組、台中の林紹堂は共同で五〇万円を出資し台阪会社を設立した。本社は台北大稻埕六館街に李春生が新築した洋式ビルに設置され、社長は元大阪府参事官の棟居喜久助が就いた。そして東京の三井物産と契約し、台阪会社の樟脳製品をすべて三井物産の香港支店を通じて販売することになった⁽²²⁾。台湾の協力者を日本に招待するこうした酬庸政策はその後も引き続き実施された。招待された人物は陳拔英・林明德・陳紹年・蔡蓮舫・林克明・余步青などであった⁽²³⁾。

台湾総督府は台湾を領有したあと「治台開化」の政策の下で積極的に台湾の協力者を日本へ招待し、日本の近代文明を紹介した。吳子周・林紹堂などは積極的に日本見学に参加した台湾人の代表である。一方、李春生はセメント生産に関心を示し、林紹堂は大阪の有名な住友組と藤田組と共同で樟脳業を経営しはじめた。こうしてみると日本見学は台湾の産業経営に役立ったといえよう。この効果を見て、一八九七年に総督府は産業発展を目標とする日本見学や博覧会見学などを台湾人に呼びかけ、台湾経営や台湾経済開発への台湾人の参与に励むようになるのである。

二 博覧会見学と殖産興業

一八九七年九月に神戸で開催された第二回水産博覧会に出展された台湾の展示品は三四八点あった。総督府は台北・台中・新竹の三県および澎湖庁に各地域より博覧会見学者を一名選ぶように指示した⁽²⁴⁾。台中県より派遣された林其生と李清水は、水産博覧会を見学したあと報告書を提出している。その中で日本の見聞を詳しく記述し、とくに展示された台湾の水産品と水産道具を日本のものと比べた結果、台湾の天日塩だけは日本産品より質がよいと書かれ

ている。林其生らはそれを非常に悔しく思い、台湾に帰つてから関係者にこのことを伝え、商品を改良しようとした。⁽²⁵⁾ 彼らの報告書の中にはこのように博覧会の展示品を評価して優劣を比較し、台湾の生産を改良しようという考えが示されていた。

一八九九年初め、鹿児島で九州沖縄八県連合共進会が開催された。総督府は一八九七年のように台北・台中・台南三県に対し各県三名の見学者を選ぶよう要請した。まず共進会を見学させ、それから大阪・京都・東京で見学させる計画であった。台北県は新竹参事の葉文暉、新竹公学校甲科生の李少福、新店街長の許又銘、錫口公学校教員の林希張を選んだ。台北県農商課長の横山壮次郎とその部下の川田武彦が葉文暉などを日本へ案内した。一行は三月一日に出発し、鹿児島で共進会を見学したあと、神戸・大阪・京都・東京などで見学し、一ヶ月あまり滞在した。⁽²⁶⁾

総督府は経費を補助し、殖産を担当する官員が自ら引率した。その目的は知識を広げ、技術を高めることにあったと思われる。⁽²⁷⁾ 一八九九年の共進会の見学に関して総督府は綿密に計画し、また各県の見学担当者は共進会だけではなくほかの日本の大都市も案内し、台湾人に近代化された日

本の農工商業を見学させた。

林希張は台北庁大加納堡中陂庄の農家の出身である。清朝の頃、苦学の末、科擧の秀才に合格した。一八九四年四月に紳章を授与され、錫口区長を務めた。新竹参事の葉文暉は代々新竹街に住んでおり、先祖は同安から台湾に移住してのち農商に従事して財産を築いた。葉文暉の父親である葉瑞陽は勉強好きで科擧の秀才に合格していた。許又銘は新店の人で、数回にわたって日本軍に協力し、一八九六年に新庄保良局長、一八九八年に新店街長を務め、一九〇〇年に叙勲された。⁽²⁸⁾

台中県の見学者は清水の蔡嘉興、胡蘆墩の陳洪謨、彰化の吳土星であったが、一行は三月一三日に出発した。陳洪謨は一八八〇年生まれで、一八九九年に彰化伝習所を卒業した。⁽²⁹⁾ 台北県の見学者が主に参事、街庄長など声望のある地方行政の末端職員だったのに対し、台中県の見学者は青年学生が中心であった。

総督府は林希張らに対して、共進会の見学を通じて日本の近代文明を詳しく台湾人に伝えることを期待していた。⁽³⁰⁾ つまり、一八九六年に李春生を派遣した目的と同じであった。林希張らは台湾に戻ってから日本での見聞を「東遊日

記」にまとめ、漢文で『臺灣日日新報』に相次いで発表した。新聞などを通じて知を共有する台湾社会の指導階級に、新しい知識を伝播したのである。

一行は一八九九年三月一日に出発し、四日に沖繩県を訪問、そのあと鹿児島へ移動して九州沖繩八県共進会を見学した。その後、大阪や神戸などで川崎造船所・石鹼製造所・大阪紡績株式会社・大阪時計製造株式会社・天満織物株式会社などを見学した。東京では政府機関や学校などの公共事業を中心に見回った。機械文明の見学がおもに阪神と九州で行われた点では、東京の大規模機械化工場を見学した李春生とは異なる。見学内容を決めた総督府の考えは不明である。殖産興業を目的とする今回の派遣はすぐにその効果が現れた。許又銘は台湾に帰ってすぐに日本の織物機械を導入し、新店で機業伝習所を開設した。こういった積極的な行動は総督府の期待に沿うものであった。効果をまのあたりにした総督府は、台湾郷紳の日本見学を勧誘するために、交通費を優待する制度を打ち出した。日本貴族、国會議員、商業会議所の幹部らが台湾視察の際、列車と船の費用を免除されるという方法を真似して、一八九九年七月に台湾郷紳を優待することになった。

総督府は台湾人が日本見学に大いに啓発されるのをみて、これを奨励すべきと考えた。一八九九年七月には台湾人が日本見学をする際、船賃の全額または半額が免除されるようになった。具体的には参事、街庄長、紳章授与者、年間三〇円以上の納税者（国税と地方税）は無料で船（二等船室か二等船室）に一回搭乗できるようにしたのである。

しかし、この優待条件に対して宜蘭庁長が異議を示した。優待条件に準じる人には年配者が多く、長距離の移動に慣れていないため、応募者はそれほど多くなかったからである。宜蘭庁長は優待条件に準じる家族の壮年層か、将来産業に参加する可能性が高い青年層のなかから派遣することを提案した。しかし、総督府はこの提案を採用しなかった。

一方、汽船会社は経営を優先するために総督府の優待政策に対し、無料搭乗できる者は一回につきせいぜい二名までとし、満員の場合には無料搭乗者を拒否できるとの制限条件を出した。総督府はそれに同意した。ちなみに日本見学者は台湾島内で列車などに搭乗する際、運賃も免除されることになった。⁽³⁾

日本文明を体験させるために台湾人の日本見学を奨励した総督府は、優待者の定員や身分などを限定し、その対象

を参事・街庄長・紳章授与者・高額納税者などに限った。要するに、総督府は地方の有産階級や指導階級を籠絡し協力させようとしたのである。

総督府の優待政策に応じて台湾郷紳は相次いで日本見学を行った。一九〇〇年四月に東京で共進会が開催されたときには、台中県の林幼春・施範其・楊偉修・李雅欣など二二名がこの機会に京都貿易品博覧会、新古美術共進会、各地の実業博覧会などを見学し、東京台湾協会を訪問するという日程を組んだ。同じ時期に台北の林望周は三戸と本田と同行して日本を見学し、特に商務を視察した。⁽³²⁾

三 総督府による大阪博覧会見学の勧誘

明治期に日本各地で大規模な勧業博覧会が開催されたが、それは産業振興を図る目的の催しであった。一九〇三年に大阪で開催された第五回国勧業博覧会は、日本国内で開催された五回目の大規模な博覧会であった。これまでと異なり、日本は遂に国際的承認を得た植民地として台湾を獲得し、帝国主義国家の一員となっていた。ヨーロッパをまねて帝国の富と強大さを示すために、第五回の博覧会では台湾の展示品が展示された。しかし、当時日本の産業はまだ

発展しておらず、博覧会の目的は文字通り「内国勧業」であった。従来のように殖産興業を中心とした経済的な要素が強かった。⁽³³⁾一九〇〇年に博覧会の開催が決定された際、台湾で殖産興業政策を実施していた総督府は積極的にこの機会を利用し、大規模な台湾社会の参加を呼びかけ、台湾郷紳の日本見学に励んだ。⁽³⁴⁾

一九〇〇年春、総督府殖産局は殖産協議会を開き、三年後の大阪博覧会への参加準備を始めた。台湾領有後、最初の博覧会であり、台湾を正式に日本帝国に紹介する機会でもあった。総督府は地方政府にできるだけ台湾の物産を集めるように指示を出し、日台間の貿易を促進しようと考えていた。また、総督府にとって、この機会を利用して、台湾人の日本見学を補助し、日本の殖産事情を台湾人に認識させることが急務であった。しかし、多数の台湾人の日本見学にかかる旅費は少額ではなかったので、殖産局は地方政府に事前調達するようにと指示したが、その際、これは地方の殖産にとって重要なことであると強調している。⁽³⁵⁾

政府の予算から台湾人の日本見学を助成するという殖産局の構想は、財政困難に陥った台湾の実情から見れば、実現の可能性はそれほど高くなかった。そこで、一九〇二年

になると引き続き台湾人の日本見学を勧めてはいたが、政府からの経費補助にかわって、列車や船の運賃の割引を行うよう、また大阪にある台湾協会支部には台湾会館を設置し、食事や宿を提供するように要請した。同時に各庁に今後勧誘のみ行うよう指示した。⁽³⁶⁾ こうして日本社会には総督府の施政に協力させると同時に、台湾人の日本見学の負担は台湾社会に転嫁された。総督府は勧誘のみを行い、必要な財政コストを最小限に抑えた。

各庁は総督府の指示に応じて街庄長に日本見学を勧誘した。台北庁では一九〇二年春に街庄長議會で、菊池庁長が三九名の街庄長に毎月事務費から五円を貯金し、それを旅費に充てるように勧めた。⁽³⁷⁾ 深坑庁は一九〇三年二月に正式に告諭を出した。第五回内国勸業博覧会の目的は殖産興業で、それによって国の利益や国民の幸福を促進させる。毎年開催される博覧会ではなくて非常に貴重な機会である。列車と船は優待運賃で利用でき、季節もちょうど観光にいい時期で、費用はわずか四五円である。見聞を広げ、事業を発展し、生活を豊かにせよというのがその内容であった。そしてこの告諭を漢文に訳して全員に知らせた。⁽³⁸⁾

台湾協会大阪支部は宿泊の手配や日程作りなどに協力し

た。台湾協会報には漢文で「観光引路」が掲載されたが、それは日本の交通や各大都市の特色と観光場所などの情報が記載された案内書であった。また、博覧会見学は台湾社会に役立つことが強調された。参事・街庄長が勧誘対象であったので、博覧会の参加や見学は街や庄の発展につながることも強調された。さらに交通費は割引され、大阪台湾協会が特設した台湾館は台湾の習慣に従って内装され、異郷にいるのに故郷にいるかのようで、費用は非常に安いことも強調されている。見学する予定のある人は一ヶ月に五円か一〇円を貯金すれば旅費に充てられるし、今かかるとも強調されている。見学する予定の千か万の価値で返ってくることも宣伝していた。⁽³⁹⁾

各庁と台湾協会の勧誘の仕方は基本的に同じであった。具体的にいうと、漢文を利用して台湾社会に情報を広げ、定期的にも少額の貯金を勧め、台湾風の宿や食事が手配されることを強く宣伝した。また、博覧会見学と旅行を通して新しい知識を吸収し、新たな営利の道を見つけ、低い投資額で高い利益を得られることを強調し、台湾郷紳に日本見学を強く勧めたのである。

台湾社会は政府の勧誘に対してどのように反応したので

あろうか。台北の深坑庁の張徳明などは積極的に庁長の呼びかけに応じたのに対し、台北庁の街庄長らの態度は比較的消極的であった。一九〇二年以来の勧誘をうけて張徳明などが出発したあとも、多数の街庄長らは動きを示していない。そこで菊池庁長は街庄長会議で再び「熱心に訓諭」し、その結果、台北庁に所属する街庄長らの九割がようやく大阪へ行くことになったのである。⁴⁰

その他の地方でも無理に大阪へ行かせた例があった。鹿港の範其などには彰化庁長と同じ船で日本へ行かせた。大嵗区長長の呂鷹揚と同街の王式璋は桃園庁長の命令を受けて日本に行くことになった。鳳山庁も同様に極力勧誘した。⁴¹鳳山半屏里の地主であった楊鴻恩は、自分の履歴書の中で、鳳山庁長の命令に応じて一九〇三年に国内勸業博覧会を見学したと記述している。⁴²つまり、積極的に政府の政策に応じる台湾郷紳もいれば、「庁長の命令に応じ」て大阪博覧会を見学する郷紳もいたのである。

全体から見れば、街庄長を勧誘対象とした政策は成功とはいえなかった。各庁は少なくとも一〇〇人以上参加者が出ると予測したが、博覧会が正式に開幕した一九〇三年三月までに大阪へ行く意欲を示した郷紳の人数は五〇〇人

に満たなかった。長旅に出たくない理由はたくさんあった。たとえば、アヘンの飲用が不便なことがある。経験者からの噂、なかでも日本見学をするために数百円から一〇〇〇円もかかってしまい、台湾に帰ってきて破産寸前に追い込まれてしまったという話を聞き、日本へ行く気力をなくした者もいた。また、これまで旅行の習慣がなかったので、長い旅を考えると躊躇してしまう者もいた。⁴³先述した宜蘭庁長の意見に見られるように、勧誘対象は高齢者で参加意欲に欠けていたため、多くの見学者は政府の「熱心な勧誘」を前に無理して大阪へ行ったのである。そこで台湾総督府は国家経費から補助金を提供することにしたが、小規模であった。各庁長は産業に関心を持っている人か有産階級の知識人を一人選び、地方政府から旅費を支給することになった。⁴⁴政府の補助金で日本に行った人数は少なく、八月までの統計によると台湾からの見学者はおよそ五〇〇人であり、それはほとんど中流以上の有名な資産家であった。

四 総督府による台湾産業の機械化

植民地化された社会に機械文明と資本主義を認識させて工業化するということは、植民地政策としては一般的に見

られない。では、総督府はなぜ積極的に日本に行かせたり機械化された工場を見学させたりしたのであろうか。当時、総督府の政策に協力して日本見学を手配した台湾協会がこれについての詳しい解釈を残している。台湾協会は一八九八年四月二日に東京で設立され、元台湾総督の桂太郎が会長に選ばれ、元民政長官の水野遵が事務担当の幹事に選ばれた。水野はこれまで数度にわたって台湾人の日本見学を案内し、経験豊富であった。

日本人の台湾旅行と台湾人の日本見学に協力することは、設立後の台湾協会の重要な事業の一つとなった。台湾人に日本見学をさせる目的について台湾協会は次のように考えていた。「其の一、見聞を広げて台湾を豊かにすることに協力できるようにする。其の二、隣保を勧誘し日本を見学することによって互いに理解しあう」と。つまり、日本見学は台湾の経済開発と相互理解に有益であると認識していたわけである。しかし、協会成立の一年後、来日した台湾人はわずか一三名であった。そこで、協会は西洋の機械などを導入して台湾を豊かにさせることを宣伝の重点として、台湾人に日本見学を呼びかけた。「西洋の機械を使い、その原理や方法を理解する。製造業は利益を得ることだけで

はなく国家を豊かにする。名望や資産を持っている台湾人は、日本の風物に触れて、施設などを実際に見て、その見聞で得た知識などを故郷の人々に伝える。見識を持たせ、実体験を通じて説得することは実に便利である」と。日本見学を通じて西洋の理論などを理解し、台湾の生産様式を改良して富を生み出すよう、漢文で台湾人に呼びかけのがあるが、つまるところ日本の国富を増やすことが期待されていた。要するに、台湾産業の開発と日本の富国強兵とが結びついたのである。

台湾領有の初期において、日本に協力した現地郷紳を日本に招いた目的は「治台開化」にあった。台湾政府はそれによって台湾人に日本文明を実感させて、順調に植民地統治を行うことを期待していた。内閣総理大臣の松方正義が第三代台湾総督の乃木希典に指示した施政方針のなかに、「台湾に新しい知識を導入し、大いに台湾産業を發展させる」との内容が書かれている。⁽⁴⁶⁾日本見学を通じて台湾を文明開化させること、それが日本の台湾統治の初期に見られる特殊性であった。

こういった特殊性を有する植民地政策の背景として、日本が置かれていた国際環境を考慮する必要がある。日本見

学によって台湾を文明化させる理由として考えられるのは、植民地主義ではなく、植民地主義の抑圧下に置かれていた日本の危機感ではなかったか。日本の歴史から見れば、一九〇五年の日露戦争の終結は新しい時代の始まりであった。倒幕を経て明治政府が成立したものの、一九〇五年までは日本はまだ植民地化される危機を脱していなかった。政府と国民は一致団結して近代西洋文明を取り入れようとし、この時代の政治指導者らはまさに謙虚・勤勉・誠実であった。⁽⁴⁷⁾東アジアの隣国を文明化させることは植民地化の危機を避けるための選択であった。たとえば、大久保利通は朝鮮を文明化させると主張した。⁽⁴⁸⁾初代総督の樺山資紀が李春生などを日本に招待した目的は台湾を文明社会に導くことにあった。

台湾社会を近代文明に接触させる植民地政策はしばらく継続された。一九〇一年に台湾総督の児玉源太郎は講演した際に次のように述べている。「東アジアの情勢はヨーロッパ列強国の智力・財力・武力の影響下に置かれていて、まるで雲が空を被っていたようである。台湾にいる間でも国際情勢に注意を払い、日本帝国の智力と財力の養成を重視し、それによって東アジアの安定を守ろうとする。台湾

の経営に努め、台湾を目下の経済競争の中で実力を持たせる」と。⁽⁴⁹⁾児玉源太郎は日本が置かれていた国際環境に対して強烈な危機感を持ち、台湾経済を発展させることによつて、日本帝国の国際競争力を強めようと考えた。つまり、日本の富国強兵という脈絡の中に台湾を置いたのである。こういった背景のもと、日本の植民地統治者は台湾郷紳に日本見学を勧め、台湾社会の近代文明と経済力の成長によつて日本帝国の実力を養成し、列強国との対抗力を強化しようと考えていた。

台湾領有の初期、日本の国内経済は未成熟で資本蓄積は充分に進んではいなかった。総督府が台湾に資本主義の生産方式である機械文明を導入しようとしたのはそのためである。日本人が台湾で工業を経営することが理想であったが、⁽⁵⁰⁾しかし日本国内の状況からそうはいかなかった。資本主義の後進性は日本政府に植民地化される危機感を感じさせた。国家財政の困難および民間資本の力不足という経済状況にある日本政府は、台湾の産業を開発できなかつた。そこで台湾に対して早く財政的に独立し、日本の国家財政の負担を減らすよう要求せざるを得なかつた。

総督府は台湾自立の目標を達成するために台湾の経済を

發展させ、事業公債での土地調査・交通建設・金融機構の設立などへの投資を考えていた。しかし、これらの公共事業は経済発展の基盤造りであって、経済の発展そのものではなかった。財政収入を拡大するために殖産興業が必要となる一方、国家財政はすべての殖産興業をカバーできず、

民間への期待は大きくなった。明治維新の経験からいえば、民間で実施した殖産興業はかなり効果があったものの、日本の資本で台湾産業を開発する使命を達成できないことが分かった植民地政府は、台湾郷紳への依存を通じての民間との協力を選択せざるを得なかった。⁽⁵¹⁾

植民統治初期に台湾の地主や商人が蓄積した経済力はかなり強く、一九〇六年の統計によると資産は一万円に達し、富豪層の人数は一三八六人に上った。一八九五年の段階でこれより多かつたか少なかつたは別として、植民地政府にとってこのような経済力は無視することができなかつた。総督府は郷紳らを優遇したり、紳章を授与したり、土地調査員に任命したりして郷紳の勢力を重視し、清朝以来、保ってきた彼らの財力を活用しようとした。⁽⁵²⁾

明治初期に日本の士族や学生は産業革命の先進国でその成果を体験し、大きな衝撃を受けた。そして汽船・蒸気機

械・機械化工場・会社の経営方式などを日本に導入し、日本の資本主義化への道を開いた。福沢諭吉はその留學生の代表で、彼が書いた見聞録である『西洋事情』は大量に印刷され大勢の人に読まれた。この本が日本に与えた影響は大きい。⁽⁵³⁾

明治初期に留学以外では、万国博覧会に参加することが西洋の機械文明をいち早く導入するもう一つの方法であった。その役割を認識した日本は、国内で頻繁に博覧会を開いたり、最も適切な展示品を選択するために、博覧会開催前に共進会や品評会を開催したりもしていた。博覧会の開催は殖産興業にとって重要であり、日本政府は政策として着実に実施していた。たとえば、一八九五年には日清戦争の最中にもかかわらず第四回博覧会が計画通りに開催されている。⁽⁵⁴⁾ 総督府はこうした日本国内の経験を生かして台湾郷紳に日本見学させたり、博覧会や共進会などに参観させたりする政策に取り組んだのである。

五 台湾社会における資本主義観念と行動

一九〇三年に博覧会を見学した台湾郷紳のほとんどは、総督府の勧誘をうけてやや無理をしながらも日本に渡った。

しかし日本見学の機会を利用し、博覧会のほかに大都會の工場も見学し、見聞を広めた郷紳もいないわけではなかった。台湾日日新報は総督府の政策に呼応して、郷紳らの日本見学の感想や見聞を載せるコラムを開設した。

郷紳らの感想はさまざまであったが、彼らは特に一般教育、農・商業などでの職業教育、近代会社制度、機械と動力による生産、生産規模の大きさなどに対して関心を示した。工業生産に参加し、学校教育を受ける日本の女性を見て、一九〇三年以降、郷紳らは相次いで娘を学校へ行かせるようになった。台北県深坑公学校教育委員の張建生は、日本見学から戻ると、娘の纏足をほどいて学校に行かせた。それから深坑庄氏は女性の教育を重視するようになり、女性の入学者は一二九人に上った。⁽⁵⁵⁾また、日本で女子教育が盛んなことを痛感した台北大稻埕の陳欽銘は、一九〇三年七月に日本から帰ると、妻に勧めて稲江公学校に入学させた。⁽⁵⁶⁾動力と機械で大規模に生産する近代工業においては、膨大な資金を調達するために会社制度は必要である。日本見学をした郷紳らは農・商業などでの職業教育の重要性、近代会社制度、機械と動力を使った大規模な生産様式の必要性を実感した。工業化の諸要素をかなり正確に把握し、社

会における近代教育の重要性を理解し、女子の学校教育にも関心を示したのである。

地元に帰った郷紳らは講演を通じて日本での見聞を郷里の人々に伝えた。台南山区の前大埔庄長は一九〇三年に「大阪で博覧会を見学した。六月に地元に戻って庄民を集め日本での見聞を伝えた。詳細に考察し、日本に対する評価は公正である。聞いている方は文明を理解できた」と⁽⁵⁷⁾いっている。このように、耳と口による間接伝授で近代日本文明の影響範囲を拡大させた。

ところで、総督府が掲げた目標は達成されたのだろうか。一九〇三年に数百名の台湾人が博覧会および日本の各大都市の近代文明を見学したことが、台湾工業にどのように直接的な影響を与えたのかという問いに答えるのは容易ではない。その理由として、参加者の詳細な名簿が発見されていないこと、そして総督府が参加者の帰国後の活動調査を行っていないことなどがある。各所に散在された資料を集めて分析することは今後の研究課題となる。これまでの調査によると、日本での見聞・体験を台湾の産業に運用できた例は製糖業・製帽業などであったが、台湾の北部・中部・南部に分散されていた。

台湾北部の陳鎮印の例をみてみよう。陳鎮印は新庄頭前庄の地主の家に生まれ、賢くて財産管理のうまい人物であった。日本が台湾を領有したあと、彼は区長に選ばれた。一九〇三年に大阪博覧会が開催された際、友人の和尚州区長の蔡學韜、新庄区長の林明德などと一緒に見学した。帰りは上海見学をして台湾に戻ってきた。当時、台北庁は伝統的な製糖工場でサトウキビを絞る動力を牛から石油発動機に切り替えることを奨励していたが、陳鎮印はこれに応じて、一九〇五年にほかの人と一緒に台北製糖会社を設立した。この時、陳鎮印はわずか三〇歳であったが、彼は製糖業を経営するのにバイナツプル缶詰業も始め、台北の有名な実業家になった。⁽⁵⁸⁾

日本が台湾を領有したあと、台中大甲の製帽業は需要の増加に伴って盛んになった。製帽業者が増え、激しい競争の中で品質が不揃いの製品が出てきた。苗栗庁は「粗製乱造すると名誉を失う」という理由で製帽業に介入し、殖産局と相談して産業組合法で規制しようと考えた。しかし、当時台湾では産業組合法を実施していなかったため介入することができなかった。そこで、製造業者に合資会社を設立することを勧めた。⁽⁵⁹⁾一九〇三年三月に製帽業者の吳朝宗

は大阪で博覧会を見学した際、帽子を二〇〇〇個持って大阪で商売した。安い値段で販売したため、儲けはわずかであった。粗製乱造の帽子では利益が少ないことがわかった彼は、高品質の商品を生産することを考えた。台湾に帰って同業者と相談し、投資を増やして熟練の人を雇うことにした。同時に林投帽の生産も開始した。九月に朱麗など大甲莆合資会社を設立するが、資金は一〇万円で、朱麗が社長を、吳朝宗は理事を務めた。⁽⁶⁰⁾大甲制帽業が近代の公司制度を導入し、商品の品質を改良した行動は製帽業に大きな影響を与えた。

彰化の武東堡内湾庄の陳邦畿は地域の富紳で、大阪博覧会を参観したあと、ほかの地域も見学したが、商務と学校に最も関心を持っていた。台湾は果物の生産量が多いので、日本のように缶詰を作れば必ずよい商売になると考えた彼は、日本人の三山と組んで千円を投資し、製造機械や石油発動機を買うことにした。彰化へ戻って果物缶詰機械化工場を作ろうと計画した。⁽⁶¹⁾日本統治時期において台湾のバイナツプルの缶詰生産地は彰化と鳳山であったが、陳邦畿の行動は彰化バイナツプル缶詰産業との関係で注目したい。

台湾南部の塩水港庁長村上先は熱心に地域の産業発展を

推進していた。一九〇三年に総督府の勧誘に応じて参事、街庄長などを引率して日本見学を行い、特に製糖業と関連する台湾の資産家に日本製糖工場の機械を見学させた。そして台湾に戻ってから林耀宗など七名の台湾人は「麻豆製糖会社」を設立した。資本は五万円で、総督府は彼にアメリカから導入した機械を貸しつけた。これによって台湾の伝統製糖業は機械化され始めた。⁶²⁾

一九〇三年に大阪博覧会と日本の大都市の機械化工場を見学したことで、台湾郷紳らは機械に対する認識を深めた。彼らは自主的にあるいは植民地政府の奨励をうけて機械での生産を始めた。また、経営様式にも変化が見られた。合資・組合などの経営様式を取り入れ、共同経営者を増やした。たとえば、麻豆製糖・大甲蔴帽合資会社などであった。台湾日日新報はこれらの変化について、次のように報道している。多くの場合、企業は共同組織を利用する方が、単独経営より成功の可能性が高い。台湾人はその利点を知っている。南投庁と彰化庁の下でさまざまな組合が成立し、共同経営が行われている。⁶³⁾

台湾総督府は産業生産を推進するために、一九〇二〜一九〇四年の間に臨時対策として、台湾人が日本商法を利用

して株式会社を設立することを許可した。先述した朱麗のほかに、阿緱蘇雲梯など一三名が一九〇三年七月に「南昌製糖会社」を、塩水港の郭升如などが一九〇三年八月に「塩水港製糖合股会社」を、鳳山の陳中和などが九月に「新興製糖株式会社」を設立した。ここに台湾の経営様式の変化が見られる。

一九〇三年の日本見学は確実に成果をあげたと当時は思われた。殖産興業と纏足をほくくことが当時の二大ブームとなった。⁶⁴⁾ 機械・石油発動機・近代会社制度・新式教育などを導入したことは、単に機械を導入して生産様式を改良するという総督府の期待を超え、資本主義へと転換する重要な条件となった。こういった変化は、日本統治初期に台湾総督府が上から下へと資本主義を推進し、選択的に資本主義を台湾社会に取り入れたこと以外に、⁶⁵⁾ 台湾社会が下から上へと自主的に、かつ比較的全面的に資本主義を取り入れようとした行動の結果でもあろう。

むすびに

一八九五〜一九〇三年の台湾総督府は、一貫して積極的台湾郷紳を招待し、日本見学を勧誘して、それによって

台湾を文明社会へと導こうとしていた。こういった政策は一八九七年を分岐点とし、前半は植民地支配を中心に酬庸の傾向が強かった。日本に協力して日本支配を受け入れる郷紳や学生を日本に招待し、彼らが台湾へ戻ってから日本の近代化の状況を伝え、日本への信仰を助長させ、台湾社会に日本支配を受け入れさせる目的であった。こういった政策は台湾人の殖産興業に対する関心を引き起こしたといえる。総督府は一八九七年に各県に水産博覧会の見学者を派遣するように要求し、さらに一八九九年には各県から三名の経験者の派遣を要求した。この時点で殖産興業が日本見学の目標となっていたことは明らかである。一九〇三年に大阪で開催された第五回内国勸業博覧会は、産業を奨励するもっともよい機会として利用され、総督府は台湾人の日本見学を強く勧めた。

総督府の財政困難と日本国内に溢れていた植民地化への危機感は、日本社会の門戸開放を促した。日本の近代文明・近代工業・機械文明を台湾人に実感させ、戻ってから機械・動力・会社・教育の重要性を認識させた。台湾に帰ってから総督府と協力し、産業経営に参加するようになった。しかし、こうした資本主義の体験はそれほど長く

は続かなかった。一九〇三年に五〇〇名を超える台湾郷紳が日本に渡ったのがピークで、かつピリオドともなった。日露戦争以後、台湾の財政は独立するとともに日本の金融資本が発展して投資能力が高まり、台湾は帝国主義下の投資植民地となってしまった。

台湾社会は日本統治の初期において、資本主義見学後の変化と影響を経験した。前後八年とそれほど長くはないが、台湾工業化の発展からいえば、まさに西洋の衝撃をうけて近代化の道を歩み始めた時期であった。数百人という大規模な日本見学は断片的に近代文明を導入した清末の洋務運動とは異なる。日本は産業革命を遂げた社会を台湾人に開き、資本主義概念および機械工業文明と関連する知識を台湾に持ち帰らせた。そして、台湾社会でよく知られている漢文を使って新しい知識を台湾の全島へ広げ、その影響力を拡大させた。これが台湾植民地統治初期の特徴だと思われる。

台湾の郷紳で無理やりに総督府の政策に巻き込まれた者は多い。とはいえ、積極的に対応した郷紳もいた。一八九六年の李春生をはじめ、日本見学経験を持つ台湾郷紳らは日本人と協力して、日本の技術と設備を導入し、台湾の伝

統産業を改良して機械を生産に取り入れるようにした。樟脳・糖・製帽などの台湾の重要な産業におけるこうした動きは、台湾の北部・中部・南部の漢人社会にまで普及した。日本の台湾統治初期において郷紳に日本見学の機会を提供したことは、台湾における順調な資本主義への転換と、機械を利用した社会と近代工業の成立にとって積極的な意義を持つている。しかし、どの程度の影響力を実際に有していたかを考える際、台湾社会の経営形式と機械化の変動についてさらに検討する必要がある。

- (1) 鷹取田一郎『臺灣列紳傳』(台北 台湾総督府、一九一六年)二五一頁。
- (2) 呂紹理『展示臺灣・権力・空間與殖民統治的形象表述』(台北 麥田出版、二〇〇五年)を参照。
- (3) 李春生『東遊六十四日隨筆』(福州 華美書局、一八九六年)八〜九頁。
- (4) 陳培豐著・王興安・鳳氣志純平編訳『「同化」的同床異夢・日治時期臺灣の語言政策、近代化與認同』(台北 麥田出版、二〇〇六年)一五七〜二一五頁。
- (5) 前掲、呂紹理『展示臺灣・権力・空間與殖民統治的形象表述』一三七頁。
- (6) 洪郁如「日本統治初期士紳階層女性觀之轉變」(『臺灣

重層近代化論文集』台北 播種者出版)二五五〜二八一頁。

- (7) 何彩滿「辜顯榮の多重身分認同」(『二十一世紀』一一二、二〇〇九年四月)。張宏謀「早期臺灣傑出的糖業名人―板橋林家、陳中和、辜顯榮、王雪農―」(『臺灣風物』第四二卷四号、一九九二年一二月)。黃俊傑・古偉瀛「新恩與舊義之間―日治時期李春生的國家認同之分析―」(『認同與國家・近代中西歷史的比較論文集』台北 中央研究院近代史研究所、一九九四年)。徐千恵「日治時期臺人旅外遊記析論―以李春生、連橫、林獻堂、吳濁流遊記為分析場域―」(『國立臺灣師範大學國文研究所集刊』四七、二〇〇三年六月)。
- (8) やまだあつし「台湾総督府の産業政策と在地有力者」(『東アジア資本主義史論Ⅱ 構造と特質』ミネルヴァ書房、二〇〇八年)一一八〜一二五頁。
- (9) 洪郁如は一九〇〇年を境として台湾郷紳の日本見学を二つの時期に分けていた。しかし、その基準は不明である。注(6)を参照。
- (10) 「臺灣士民辜顯榮」、「水野局長の臺灣談」(『東京朝日新聞』明治二八年一二月一〇日)。
- (11) 前掲『東遊六十四日隨筆』一八〜一九頁、四七〜五七頁、七一〜七九頁、一三三〜一三六頁。
- (12) 「セメント製造の計画」(『臺灣日日新報』一九〇八年五月二〇日)。
- (13) 「總督上京」(『東京朝日新聞』明治二九年三月三日)。

- (14) 「黄成章以下十三名叙勲並賜金ノ件」(叙勲裁可書・明治三十年・叙勲卷二・内国人一)。
- (15) 臺灣教育會編『臺灣教育沿革誌』(台湾教育會、一九三九年)三四～三五頁、「臺北縣・各支廳管下學事視察木下(邦昌)属復命」(臺灣總督府公文類纂)。
- (16) 「臺灣學生警戒」(『東京朝日新聞』明治三〇年七月三一日)。
- (17) 臺灣總督府編『臺灣總督府事務成績提要』三(台北成文、一九八五年復刻)一二二～一二三頁。最初の何年間は国語学校と伝習所の卒業生はほとんど政府に雇われた。総督府による日本に派遣された学生の体験およびその影響は、社会人としてすぐに殖産興業を行う能力を持っていた台湾郷紳とは異なったが、ここではこの問題を論じないでおく。
- (18) 前掲『臺灣列紳傳』二八七頁。
- (19) 臺灣總督府編『臺灣總督府事務成績提要』二(台北成文、一九八五年復刻)六三頁。
- (20) 「志切觀光」(『臺灣新報』明治二九年八月二〇四日)。
- (21) 「臺坂公司」(『臺灣日日新報』明治三〇年六月七日)。
- (22) 「陳紹年の事歴」(『東京朝日新聞』明治三〇年二月三日)。「臺民の来遊」(『東京朝日新聞』明治三〇年三月一四日)。「台湾住民蔡連舫以下四名叙勲ノ件」(叙勲裁可書・明治三〇年・叙勲卷一・内国人一)。「台湾住民呉鸞旂以下三名叙勲ノ件」(叙勲裁可書・明治三十年・叙勲卷一・内国人一)。
- (24) 前掲『臺灣總督府事務成績提要』三、一三五～一三六頁。
- (25) 「第二回水産博覽會ニ關スル參觀土人林其生外一名(李清水)所感」(臺灣總督府公文類纂)。
- (26) 「觀光土人の歸來」(『臺灣日日新報』明治三二年四月一三日)。「東遊日記葉文暉稿」(『臺灣日日新報』明治三二年二月一四日)。「開共進會」(『臺灣日日新報』明治三二年二月一四日)。
- (27) 梯雲樓「觀賽會論」(『臺灣日日新報』明治三二年二月二五日)。
- (28) 前掲『臺灣列紳傳』三二頁、五二頁、一二七頁。
- (29) 「宮城共進會の觀光土人」(『臺灣日日新報』明治三二年三月一六日)。「臺灣人士鑑」(『臺灣日日新報』明治三二年一月九日)。
- (30) 「東遊日記林溪張稿」(『臺灣日日新報』明治三二年一月九日)。
- (31) 「本島人觀光ノ為メ内地へ渡航スル者汽船便乘ニ關スル件」(臺灣總督府公文類纂)明治三四年乙種永久保存、一九〇一年七月)。臺灣總督府編『臺灣總督府事務成績提要』五(台北成文、一九八五年復刻)二二〇～二二二頁。「免瀛車賃」(『臺灣日日新報』明治三二年七月一三日)。
- (32) 「送別會開」(『臺灣日日新報』明治三三年四月一〇日)。「内地觀光」(『臺灣日日新報』明治三三年四月二九日)。
- (33) 前掲 呂紹理『展示臺灣・權力・空間與殖民統治的形象表述』三八頁。

- (34) 社説「更に本嶋人の博覧會觀覽を獎勵すへし」(『臺灣日日新報』一九〇三年三月一日)。
- (35) 「勸業博覧」(『臺灣日日新報』明治三十三年三月九日)。「議博覽會」(『臺灣日日新報』明治三十三年四月一日)。
- (36) 前掲「臺灣總督府事務成績提要」八、二七七頁。
- (37) 「臺北廳下の博覧會觀覽土人」(『臺灣日日新報』一九〇三年二月一日)。
- (38) 「深坑廳告諭第一號大坂ニ於ケル第五回博覧會觀覽ニ關スル件」(『臺灣總督府公文類纂』明治三十六年永久保存、一九〇三年二月)。
- (39) 「再論博覧會有益於世」(『臺灣協會會報』四五、一九〇二年六月二〇日、五七、五八頁)。
- (40) 「臺北附近の上遊者」(『臺灣日日新報』一九〇三年三月一日)。
- (41) 「大飽眼福」(『臺灣日日新報』一九〇三年三月一日)。「賽會錢行」(『臺灣日日新報』一九〇三年三月一日)。「鳳山博覧會上遊者」(『臺灣日日新報』一九〇三年三月二一日)。
- (42) 前掲「臺灣列紳傳」三二六頁。
- (43) 社説「更に本嶋人の博覧會觀覽を獎勵すへし」(『臺灣日日新報』一九〇三年三月一日)。
- (44) 「總督府の上遊者獎勵」(『臺灣日日新報』一九〇三年五月六日)。前掲「臺灣總督府事務成績提要」八、二二七頁。
- (45) 「切望來遊」(『臺灣協會會報』一三(一八九九年一〇月)、一八六、一八七頁)。
- (46) 「台灣施政方針之儀内閣總督大臣伯爵松方正義より台灣總督男爵乃木希典宛」(明治三十三年八月三日)。「後藤新平文書」。
- (47) 鶴見俊輔「戰時期日本の精神史」(岩波書店、一九八二年)九、一二頁。
- (48) 「天久保利通文書」五、五八、五九頁。
- (49) 児玉源太郎「殖産興業ニ関スル總督ノ演説」一九〇一年一月。
- (50) 「内地土商の來臺を促がす」(『臺灣日日新報』明治三二年五月七日)。「殖産微言」(『臺灣日日新報』明治三二年六月二一日)。
- (51) 前掲、やまだあつし「台湾總督府の産業政策と在地有力者」一一九、一二〇頁。
- (52) 黃紹恒「從對糖業之投資看日俄戰爭前後台灣人資本的動向」(『台灣社会研究季刊』二三、一九九六年、八三、九九頁)。
- (53) 高村直助「会社の誕生」(吉川弘文館、一九九六年一月)六、七頁。
- (54) 清川雪彦「技術情報の普及と市場の形成」(『日本の經濟發展と技術普及』東洋經濟新報社、一九九五年、二四二、二四九頁)。
- (55) 「女子教育風化」(『臺灣日日新報』一九〇三年八月九日)。
- (56) 「教妻入學」(『臺灣日日新報』一九〇三年九月五日)。

(57) 前掲『臺灣列紳傳』二五一頁。

(58) 多田喜造「大稻埕に於ける陳氏の鳳梨罐詰業」(『臺灣農事報』四七、一九一〇年一〇月)二四頁。前掲『臺灣列紳傳』六一頁。

(59) 「大甲席帽會社の設立」(『臺灣日日新報』一九〇三年三月一〇日)。

(60) 「草帽改良」(『臺灣日日新報』一九〇三年六月二〇日)。「雜報 大甲席帽合資會社」(『臺灣日日新報』一九〇三年九月二二日)。

(61) 「觀光述談」(『臺灣日日新報』一九〇三年五月二七日)。

(62) 森久男「台湾総督府の糖業保護政策の展開」(『台湾近現代史研究』一、六三頁)。「麻荳製糖株式會社創立」

(『臺灣日日新報』一九〇三年一月一九日)。

(63) 「共同事業之發達」(『臺灣日日新報』一九〇四年五月七日)。

(64) 「慣習小言」(『臺灣慣習記事』第五卷三号、一九〇五年三月、七五〜七六頁)。

(65) 駒込武「台湾における「植民地的近代」を考える」(『アジア遊学』四八、四〜九頁)。

〔付記〕 本論文は二〇一〇年二月一日に開催された大阪経済大学日本経済史研究所主催の第六一回経済史研究会「近代における日本と台湾」において報告したものに手を加えたものである。大阪経済大学の吉田建一郎先生をはじめ参加者から貴重なコメントをいただいた。ここに記して

お礼を申し上げます。

(こう しゆくえん・台湾 国立成功大学歴史学系副教授

〔訳／えん りつ・大阪経済大学経済学部准教授